

いじめとは何か
～人格を否定する行為～

いじめの認知件数が増加の一途をたどっています。本県では、「きめ細かくいじめを認知した結果であり、そのほとんどは解消しています」という分析がなされています。しかし、いじめがそれだけ多くあり、数パーセントであれ解決されていないいじめが存在することも事実です。

実際、令和5年度の山梨県におけるいじめの認知件数は小中学校で8,200件あり、その約2%は9月末現在、まだ解消されていないと報告されています。割合だけで見ると微々たるもののように見えますが、件数に直すと、なんと160件余りが解消されていないことになります。それだけの子どもたちが、まだ苦しんでいるとも言えるのです。私たちはこの現状をどうとらえたらよいのでしょうか。

文科省では、いじめを次のように定義しています。「児童・生徒に対して、(中略)他の児童・生徒が行う心理的又は物理的な影響を与える行為であって、対象となった児童生徒が心身の苦痛を感じているもの」です。これは、いじめる側の“行為”といじめられる側の“心理状態”を定義したものであり、いじめる側の“心理状態”は定義していません。確かにそれを定義することは難しいことであるようにも思われますが、私たちは、それをしっかりと把握しなければ、解決に向けた適切な取り組みは出来ないと思います。ただ「いじめはいけません」と指導するだけでは難しいように感じるのです。

そこで私はいつも、重松清さんの小説『青い鳥』の中の一節を思い出します。そこにはいじめる側の心理が次のように描写されています。「いじめは

人を嫌うからいじめになるんじゃない。人数がたくさんあるからいじめになるんじゃない。人を踏みにじって、苦しめようと思ったり、苦しくて叫んでいる声を聞こうとしないのがいじめなんだ」と。

私はいじめの本質がここにあると思います。相手を踏みにじるとは、つまり相手の人格を否定することです。

受けた行為の捉え方は、人によって違います。例えば、気持ちの強い子であれば、ある人物から「お前の国語のテストの点数、悪かったよな」と言われたとしても、「何言ってるんだい。お前の算数の点数もかなり悪いじゃないか」と言い返せます。これはただの言い合いです。ところが、気の弱い子に同じ言葉を言ったとしたら、言われた子は落ち込んでしまって、自分をだめなやつだと思い込み、傷ついて悲しい思いをするでしょう。こちらはいじめになると思われます。

言う方は同じ言葉を発しています。しかし、受け取る方は全く違う受け取り方をする場合があるので。それなのに、「僕はそんなつもりはなかった。気にする子の方が悪い」というのがまかり通ってしまえば、いじめはいつこうになくならないでしょう。

中には、先のように言われた時、「へへへ、俺さ、国語苦手なんだよなー」と笑って過ごす子もいるかもしれません。笑っているから大丈夫なのでしょう。いや、むしろ心の中では悲しくて泣いているかもしれません。ただ、その子は、そうやって笑みを浮かべて対応するしかできず、それがその場をやり過ごす精いっぱいに対応なのかもしれないのです。

人にはそれぞれ個性があり、自分が感じるのと同じように感じる人ばかりではありません。だから「イヤならイヤって言えよ」と言われても、それができ

ない子もいるのです。その心理をわかること、またそういう子もいるということを自覚することが、いじめをなくすことにつながっていくと思います。時には大人ですら、「あなたも、もっと強くなりなさい」などと声掛けをする場合があるかもしれませんが、そういう子にとっては、これほど残酷な言葉はないのです。

相手の気持ちをわかること。あるいは、そこまでわからなくても、いろいろな受け取り方をする子がいるんだということを知ることが非常に大事だと思います。そういったことを学ぶところが、学校です。何を言われてもされても全く平気な人などいません。誰だって、ひどいことを言われたりやられたりしたら、少なからずいやだと思います。そして、その感情にも大小があるということ、それをしっかりと自覚することが、とても重要だと思うのです。相手を認めて、敬意をもつということはそういうことなのだと思います。

「やってはいけません」と、その時の行動を注意するだけでは、上手く伝わらないと思います。これを続けると、言われたからやる、言われなければやらないという人間になっていきます。

「なぜダメなのか考えましょう」と、問いかけることが重要です。そうすることで、その行動を起こしてしまった根本の考え方を振り返えられるようになります。その繰り返しで、自分で判断して行動する人を育てていくのです。

そういう意味で、「反省」から「内省」へ進展していくことが大事だと思います。「反省」とは、自分の言動の良くなかった点を振り返り、その行為自体を改めようとすることを目的としています。反省文を書く、というのはこれですね。一方、「内省」

とは自らの言動や考え方について客観的に振り返って分析し、気づきを得ることを目的としています。これからの教育に必要なのは、この「内省」ではないでしょうか。

そのためには、「ここがよくなかったね」「こんなことしたら相手は怒るよね」と教師の考えを半ば強制的に押し付けるのではなく、「どうしてこういう行動をしたの?」「その時どう思ったの?」と、自分の行動を客観的に振り返らせるような問いかけが必要です。

「いじめはしてはいけません」と言うだけなら、教職員でなくても、誰でも言えます。「自らに問いかけ、自ら考える力をつける」、それこそが今日的な教育課題であり、それは、道徳とか学活とかの特定の時間だけで育てるものではなく、あらゆる教育活動を通して育てていくものだと思います。

このような力は、一朝一夕につくものではなく、徐々に子どもたちの心に育っていくものです。教職員は1年勝負と思っている方も多いかと思いますが、児童・生徒は義務教育だけでも9年間あります。必ずわかる、必ず変わると信じて、信念をもって、焦らず、教育活動に当たっていくことが、子どもたちにとっての幸せだと思います。

市川三郷町教育長 渡井 渡

